

平和への思いを未来につなぐ

先日、校区内の南阿蘇西小学校の6年生が修学旅行に行き、長崎の永井隆記念館を訪れた記事が

以下のように新聞に載っていました。

永井博士からもらった「平和の種」 育てた南阿蘇の児童が届ける

長崎市上野町の永井隆記念館に26日、熊本県南阿蘇村の小学生たちが校庭に咲いたコスモスの種を届けた。コスモスは71年前、原爆で被爆した永井隆博士を見舞った村の中学生が種をもらい、平和の尊さを伝える花として育ててきた。

同館によると、博士が晩年を過ごした住居「如己堂」の周囲には秋にコスモスが咲いていたという。1948年には米国のヘレン・ケラーがコスモスを手で折り、病床の博士に手渡したというエピソードもある。

南阿蘇村の中学生が修学旅行で如己堂を訪れたのは、ケラーの翌年。永井博士から見舞いのお礼としてもらった種は生徒たちの手で育てられ、校庭で花を咲かせた。生徒たちはお礼の手紙を書き、如己堂との交流は51年に博士が亡くなるまで続いたという。

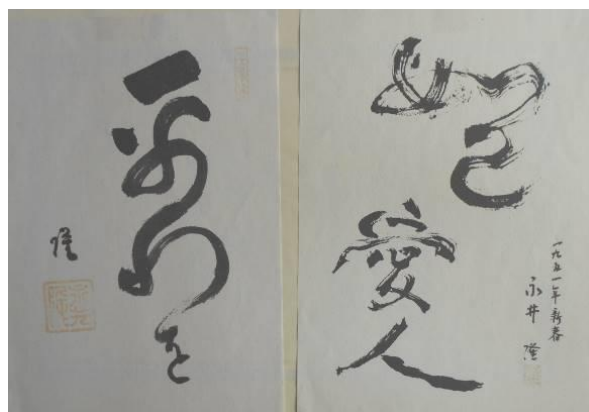
校庭の花の種はその後も卒業式で配られるなどして村に広まり、平和学習で活用された。南阿蘇西小もそのひとつ。今年6月に苗を植え「自分たちで平和を広げるきっかけにしよう」と、修学旅行先の同館と長崎原爆資料館に種を届けることにした。

この日は6年生21人が記念館を訪問。自身も原爆で重傷を負いながら被爆者の治療に当たった博士の生涯を学んだ後、代表の長野実緒(みお)さん(12)が博士の孫にあたる永井徳三郎館長に種が入った瓶を手渡した。

「私も永井博士のように他人のことを優先して考えるようにします」と長野さん。同館では種を育て、来年の修学旅行生に配ることを計画している。 【10月27日(火)11:20 西日本新聞】

永井博士のことは、私も小学校の修学旅行で「如己堂」を訪れた時に話を聞いた記憶がありますが、忘れてしまっていました。実は南阿蘇中の校長室に永井博士からいただいた色紙等があるのですが、それを見ても思い出せませんでした。この機会に永井博士のことを調べ直してみると南阿蘇村の人たちのやさしさ、温かさの原点の一つがこの交流に表れていると思いました。1949年に中学生だった地域の先輩方は現在86歳程です。

残念ながらこのコスモスは現在の南阿蘇中にはありませんが、平和や命を大切に作るシンボルとして南阿蘇中でも再び育てていきたいと考えています。



(直筆の書、「平和を」と「如己愛人」)

NHK連続テレビ小説『エール』第94話で放映された中に映っていました。

※裏面に永井隆博士の生涯を載せています。

将来について考えています

先週は2、3年生が本校での高校説明会を受け、将来について考えましたが、今週は1年生が農業

体験で地元の方々の仕事を体験しました。生徒の話を聞くと、リモートでなく直接だからこそ、気づいたこともあったみたいです。ご家庭でも話題にされてみてはいかがでしょうか。体験学習も学校での教科の勉強も「未来の自分さがし」です。すべてつながっています。

永井博士の生涯(レントゲン医療につくす～長崎の鐘のモデル～)

- ・1908年(明治41年) 島根県松江市で誕生。

父が、島根県飯石郡飯石村大字多久和に医院を開業したので家族とも移住した。永井は、飯石小学を卒業し、その後、松江に下宿し、松江中学、松江高校を卒業した。

- ・1928年(昭和 3年) 長崎医科大(現在の長崎大学医学部)に入学。

大学の裏隣に浦上天主堂があった。天主堂の真向かいにあった森山家に下宿した。森山家は三百年続いたキリシタンの信徒頭の子孫で、その家もかつて秘密礼拝堂であったという。

- ・1932年(昭和 7年) 長崎医大卒業。

悪性の中耳炎にかかり、死の瀬戸際にたたされた。手術で一命をとりとめたが、耳が聞こえにくくなる障害が残り聴診器を使えなくなった。しかし、このことが永井に内科志望をあきらめさせ、長崎医大の助手として、未開の分野であった放射線医学を選ばせる転機となった。

- ・1933年(昭和 8年) 広島歩兵連隊に入隊、軍医として満州事変に出勤。

この時下宿の一人娘が永井の慰問袋に一冊の本を入れてくれた。永井と同一歳の森山緑である。戦地に届けられたその慰問袋には書いていたのはキリスト教の書物であった。

- ・1934年(昭和 9年) 帰還し、長崎医大助手、物理療法科に復帰。

6月、洗礼を受ける、8月、森山緑と結婚。

- ・1937年(昭和 12年) 長崎医大講師。

中日事変に応召。軍医中尉として中国の第一線に従軍。

- ・1940年(昭和 15年) 長崎に帰還。長崎医大助教授。物理的療法科部長になる。

結核予防、治療のためにレントゲンが重要になり、永井も毎日多勢の人のレントゲン検診を行った。当時は、翌年戦争に突入していく時代であり、レントゲンに従事する医療者が放射線を浴びることを防止する設備も環境も十分でなく、永井は許容量を超える放射線を浴びていた。

- ・1945年(昭和 20年) 6月、脾臓肥大で、慢性骨髄性白血病。

余命3年と診断。レントゲンの検診で長年放射線を浴び続けたためであった。8月9日、長崎に原爆が投下され、大学に勤務していた永井も被爆した。右側頭動脈切断、出血をおして救護に活動すること3日、再度失神して倒れる。

- ・1945年(昭和 20年) 8月11日、自宅焼け跡に帰って夫人の遺骨を拾って埋葬。

永井が初めて家に帰れたのは被爆三日目の夕方だった。浦上は荒野だった。天主堂は瓦礫となり、わが家は跡形もなかった。そこに立って隆は灰の中をさがした。8月12日、三山町木場におもむき、救護班を設けて二百二十五名の原爆傷病者を救護する。8月15日、終戦。永井は、9月20日、右側頭動脈再び切断、出血多量のため倒れた。25日、失神して危篤に陥る、一週間後、回復。11月、長崎、大村、諫早で大学の講義再開。3カ所をめぐって講義する。

- ・1945年(昭和 20年) 12月24日、焼け跡から掘り出された浦上天主堂の鐘が、再び鳴った。

- ・1946年(昭和 21年) 1月、バラックより仮建築の家に移る。長崎医大教授。

7月、長崎駅頭で倒れる。以来、病床にあることが多い。8月、『長崎の鐘』を書く。11月、病臥し、再び立たず。

歌謡曲『長崎の鐘』：歌謡曲『長崎の鐘』は永井博士をモデルとして、作られた。

(作詞：サトウ・ハチロー 作曲：古関裕而 唄：藤山一郎)

一、こよなく晴れた 青空を
悲しと思う せつなさよ
うねりの波の 人の世に
はかなく生きる 野の花よ
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

三、つぶやく雨の ミサの声
たたえる風の 神の歌
かがやく胸の 十字架に
ほほえむ海の 雲の色
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

- ・1948年(昭和 23年) 3月、脾臓いよいよ肥大し、腹周囲96センチ。このころ、如己堂竣工し、ここに移る。

『ロザリオの鎖』を書く。4月、『この子を残して』を書く。8月、長崎医大休職。『生命の河』脱稿。10月、ヘレン・ケラーが如己堂を訪問。

この年に修学旅行に行っています。

- ・1949年(昭和 24年) 9月、長崎医大退職。

10月、『いとし子よ』発行。マスコミからたたかれる。永井は病床にあって、次々と本を書いた。書いた本が次々とベストセラーになり、スポットライトがあたった。雑誌で、「原子病と闘う」「浦上の聖者」などと報道された。一方、おもいがけない中傷の嵐が吹き荒れ始めたのである。ある雑誌は、「長崎もので儲ける」「永井隆の商魂」「偽善者・永井隆への告発」などと報道した。次々と出版された本は、「代作者がいるに違いない」「金儲け目当ての偽善者」。永井には二人の子供がいたが、心ない者が二人の子に「寝たきりで金もうけするものもらいの子」と吐き捨て、泣いて帰宅した。隆は弁解も反論もせず、世評をじっと受け止めていた。人々は、隆が出版で得た収入の大半を浦上の再建に寄付し続けていることを知らなかった。永井は、自分を弁解しなかった。不誠実な人間の言葉などに振り回されて、大切な人生の時間を無駄にしたくない。自分にやましさがなければ、神が見守っているという、永井には信仰があった。

- ・1950年(昭和 25年) 松竹が彼の生涯を映画化した。題も「長崎の鐘」であった。

- ・1951年(昭和 26年) 病状が悪化し、腹水が増大し、全身浮腫を生じた。

4月、最後の原稿『乙女峠』を書いた。右肩甲部に内出血。書くことができなくなる。

5月1日、長崎医大病院に入院、誠一(まこと、17歳)、茅乃(かやの、11歳)の兄妹を残して、午後9時50分逝去。

この年まで永井博士との交流が続きます